

今年初

— JA健康寿命100歳プロジェクト —

JA庄内みどり2020

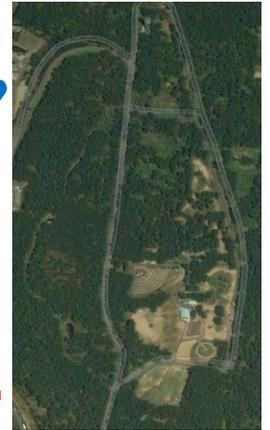
“ウォーキング倶楽部”

と き: 令和2年7月25日(土)午前9:00開始

ところ: 道の駅ふらっと東側第2駐車場

【今回の見どころ】

遊佐町吹浦 森の公園 “遊ぽっと”



道の駅ふらっとから少し上ったところにある、生活環境保全林を含む約26haの自然活用型森林公園。環境緑化に力を入れており、エントランスの植栽や果樹広場など、その時々で楽しめる仕掛けが盛りだくさん。

散策コースをはじめ、起伏に富んだグランドゴルフコースや、ピクニックに最適な芝生広場、日本海や鳥海山を一望できる「であいの丘」など、自然に溶け込んだ空間を満喫できます。

子供たちが楽しめるの遊具も充実しており、中でも“手なが足なが”の鬼さん遊具は大人気！スリリングな

スライディングで大興奮間違いなしです。800名を収容できる野外ステージ「音楽の森」では、イベントやお祭りも行われます。時期を変えてまた来なくなる、そんな公園です。(平成10年に開園)

(ウェブサイト「庄内コンシェルジュ」、酒田河川国道事務所HP参照)

“手なが足なが”伝説

今から1200年程前、三崎山に「手なが足なが」という恐ろしい怪物が住んでいて、そこを通る旅人を捕らえて食べていました。この怪物は、手が鳥海山まで届き、足は飛島までひとまたぎできたといいます。住んでいた岩の洞窟付近には人間の骨が散らばっていました。この怪物を退治しようと出かけていった武士も、帰ってくる人はほとんどいませんでした。道行く人々はおそろおそろ三崎山を通りました。



三崎山の関所あたりには「三本足のカラス」が住んでいて、近くに「手なが足なが」がいる時は「ウヤー」と鳴き、いない時は「ムヤー」と鳴きました。旅人たちはこれを聞き分けて通るようになり、この関所を有耶無耶(うやむや)の関と呼びました。

折りから来合わせた慈覚大師は、この手なが足ながの話を聞いて退治に出かけましたが、捕らえられてしまいました。しかし手なが足ながは、大師の鋭い眼力と慈しみの心に負け、とうとう降参しました。大師は、散らばっている人間の骨を集め五輪塔を建てて冥福を祈りました。

手なが足ながは、もう決して人を食べたりしないと約束し、タブの実を食べるようになりました。こうしてカラスの鳴き声を聞き分けなくても、安心して三崎山を通ることができるようになったのです。

大師は手なが足ながのために、三崎山にたくさんのタブの実を蒔いて行きました。それが現在、三崎山にうっそうと茂るタブの木なのです。



(遊佐町公式ホームページより) 三崎公園の大師堂と五輪塔

— JA健康寿命100歳プロジェクト —

JA庄内みどり 2020



今年2回目

“ウォーキング倶楽部”

と き: 令和2年9月26日(土)午前9:00開始

と ころ: 南遊佐コミュニティーセンター駐車場

【今回の見どころ】

南鳥海 “マイ夢の里”

『マイ夢』とは、(マ)学び(イ)憩い(夢)夢つなぐ、をスローガンに掲げコミュニティーセンターを中心に小学校、幼稚園が隣接された地域交流施設一帯の愛称です。平成14年5月に「マイ夢の花の里づくりクラブ」



が南遊佐コミュニティ振興会、公民館、自治会長、老人クラブ、婦人会、小学校、交通安全協会鳥海分会、花と緑の会を

構成団体として発足しました。毎年、酒田-遊佐線の県道沿いや各集落に花壇を造成し、季節の花々を植え地域の環境美化を図っています今年も5月30日、地域住民約150名でベコニアやマリーゴールドなど

花の苗約3300本を植えました。

(文: 酒田市公式ホームページより)



しろやまひめじん

【白山姫神社】

716年「白山妙理大菩薩」を祀ったのが始まりとされ、白山様(はくさんさま)と呼ばれ親しまれている。地区内随一の社格と歴史を持ち、それは両端がピンと伸びた赤い両部鳥居や社殿の見事な彫刻にも表れ、拝殿4本柱それぞれの蛙股には龍の木彫り、中央上には鳳凰、木鼻には像と獅子が彫られています。



【足山神社】

1447年(文安4)江戸 足立郡の足立観音の分体を奉祀、1544年(天分13)御神体(木地千手観音)を勧請し、祭神として祀られています。昔から手や足の不自由な方々に崇拝され、多くの人々が参拝し信仰を深めてきました。かつては、手形や足形の木彫りや杖、義足、足形の石などが本殿と拝殿に山積みされていました。



(文:「南遊佐の歴史を学ぶ会」資料より)

【宮内の御地蔵様】

南遊佐の宮内地区にある9体の御地蔵様のうち、右端にある一体は、実に悲しく、いたましいある事件

をきっかけに、昭和6年(1931)4月8日に建立されたものです。その事件とは、今から90年前の昭和4年(1929)10月28日の晩、酒田町寺町に住む中野チエという16歳の少女が辻占(つじうら)煎餅売りに、午後4時33分酒田駅発の下り列車で宮内方面にでかけ、帰途に殺害されたというものです。家が貧しく、母親も病気で働けなかった為、家計を助けるために昼はカステラパン、夕方は辻占煎餅を売っていたそうで、近所でも孝行娘として知られていたとのこと。ちなみにこの「辻占煎餅」とはおみくじの



入ったせんべいで、中華料理店のフォーチュンクッキーのようなもの。

南平田方面に辻占売りに行って若勢にからかわれたりしたこともあって、売り先を南遊佐方面に変更したところ、この事件に遭遇してしまったとのこと。



この少女の家では葬儀を出すこともままならず、近所の住民が費用を出し合い、酒田の泉流寺に葬られたとのこと。事件から1年半後、この薄幸な少女の霊を弔い、慰めようと宮内地区の住民達が寄付金を集め、辻占地蔵尊を建立しました。彫刻は遊佐の名匠佐藤千代太とのこと。 (文・写真: ブログ『あなたの知らない過去の酒田』より)

《ウォーキングで発見！》



宮内グランドゴルフ場にある木
“この木何の木？気になる木！”

『メタセコイア』

ヒノキ科メタセコイア属の落葉樹

和名はアケボノスギ、イチイヒノキ

当初は、日本を含む北半球で化石として発見される
のみで、絶滅した植物と考えられていたが、1946年
中国四川省で現存していることが確認された。



今年最終回

— JA健康寿命100歳プロジェクト—

JA庄内みどり 2020



“ウォーキング倶楽部”

と き: 令和2年11月14日(土)午前9:00開始

ところ: 国体記念体育館駐車場

【今回の見どころ】

蔵探訪“初孫”コース



酒田は、江戸時代には「西の堺、東の酒田」と言われ、海上交通の要所として栄えた港町です。廻船問屋を営んでいた初代佐藤久吉が、旧庄内藩酒井家の酒井悌一郎氏から酒造技術を学び、「金久(きんきゅう)」という銘柄を世に送り出し、酒造会社を始めたのは明治26年のことです。昭和の初め、当家に長男が誕生したのを機に、みんなに愛され喜ばれるような酒にしたいと願いを込めて、酒名を「初孫」と改めました。



明治創業当時のラベル



昭和初期のラベル

港町・酒田で誕生した
酒王初孫



日本酒は、米と水と自然界の小さな命の力によって醸し出されます。中でも「酒母」というアルコール発酵をつかさどる清酒酵母を大量に育成する工程では、微生物の営みが大きな役割を果たすのです。

近代に入り、複雑な工程の省力化を図ろうといくつかの手法が開発されてきました。しかし、初孫の蔵では、創業以来一貫して

時間と手間のかかる昔ながらの伝統手法「生酏(きもと)造り」による酒造りを行っています。

「生酏造り」とは

清酒酵母以外の生き物の繁殖を抑えるにあたり、空気中の乳酸菌を活用するやり方。長年培われた技術と経験が必要であり、現在生酏で仕込む蔵は全国的にも少ないとされています。(文・写真: 東北銘醸株式会社公式ホームページより)



初孫のシンボル

「やぶこうじ」

「やぶこうじ」の赤い実は、2つづつ仲よく実を結ぶことから、縁起の良い植物としてお正月などお祝いの時にしばしば使われました。

「初孫」はこれを幸せを呼ぶシンボルとしています。